

小学校音楽授業に関する所感の分析と洞察

エグゼクティブサマリー

本ブリーフィング資料は、小学校の音楽授業に関する複数の感想を分析し、その主要なテーマと洞察を統合したものである。分析の結果、児童の体験は大きく二つの側面で明確に分かれていることが明らかになった。

第一に、**肯定的な体験は、協同的かつ実践的な活動に集中している。** クラス全体での「合唱」や「合奏」、普段触れる機会の少ない多様な「楽器演奏」は、楽しさ、一体感、達成感の源泉として、ほぼ例外なく高く評価されている。これらの活動は、音楽の授業が持つ教育的価値の中核をなすものとして記憶されている。

第二に、**否定的な体験は、個人の技能が公の場で評価される状況、特に「人前でのテスト」にほぼ集約される。** リコーダーや歌のテストを一人ずつ、あるいは少人数でクラスメイトや教師の前で実施することは、プレッシャー、緊張、羞恥心、失敗への恐怖といった強い負の感情と結びついており、多くの回答者にとってトラウマ的な記憶となっている。この傾向は非常に顕著であり、音楽授業における最大の課題であることが示唆される。

結論として、小学校の音楽教育は、児童の音楽への関心を育む上で、集団での創造的な音楽体験を最大化し、個人の技能評価に伴う心理的負担を最小化する指導法・評価法への転換が急務である。特に、個々のテスト方法については、動画提出などの代替案の検討が有効な解決策となりうると考えられる。

1. 肯定的な授業体験の分析

回答者たちが共有する肯定的な記憶は、主に「協同的な音楽活動」「多様な楽器への接触機会」「特別な学校行事」の三つのカテゴリーに分類される。

1.1. 協同的な音楽活動への高い評価

最も多くの回答者が「良かったこと」として挙げたのは、クラスメイトと共に音楽を創り上げる体験である。

- **合唱:** パートに分かれてハーモニーを創り出す楽しさや、クラス全体で声を合わせる一体感が、肯定的な記憶の核となっている。「クラスで合唱をすること。私は合唱がとにかく大好きでアルト・ソプラノパートに分かれ、ハモることがとにかく楽しかった」「みんなで歌うのが楽しかった」といった意見が多数を占める。
- **合奏:** 様々な楽器が組み合わさって一つの楽曲を完成させるプロセスは、大きな喜びと達成感をもたらしている。「アンサンブルが好きで揃った時の爽快感が好きでした」「合奏は一人で歌ったり、演奏したりするよりも一体感や迫力が出るので、そこに楽しさを感じていました」といった声が代表的である。

1.2. 多様な楽器への接触機会の価値

普段の生活や他の教科では触れることのない楽器に実際に触れ、音を出す体験は、児童の知的好奇心を刺激し、音楽への興味を深める重要な要素となっている。

- **幅広い楽器体験:** ピアノやリコーダーといった馴染み深い楽器だけでなく、木琴、鉄琴、太鼓、琴、アコーディオン、ハンドベルなど、多様な楽器に触れる機会が高く評価されている。「色々な楽器に触れることができたり、ずっと教科書を眺める時間も少なく実践的なことが多かった」「普段触れる機会の少ない、琴の演奏を体験できた授業」などの意見がその価値を物語っている。
- **体験的学習の記憶:** 多くの回答者が「実際に体験できる学習が楽しいと思うし記憶に残る」と指摘しており、座学よりも実践的な活動が長期的な記憶に残りやすいことを示唆している。

1.3. 達成感と一体感を醸成する学校行事

音楽会や合唱コンクール、鼓笛隊といった目標志向の活動は、練習プロセスも含めて肯定的に捉えられている。

- **音楽会・発表会:** 特定のイベントに向けてクラス全体で練習を重ね、発表するという経験は、強い結束感や達成感を生み出す。「音楽発表会を通して、普段触れる機会の少ない楽器に触れられた授業」「音楽会の練習で普段あまり触れられない木琴や太鼓などのいろいろな楽器に触れられた」など、行事が楽器体験の機会としても機能していたことがわかる。
- **モチベーション:** 発表会などの目標があることで、練習への意欲が高まる。一部には「前に出て皆の前で演奏や発表をしたらシールを貰えるというのが児童達のモチベーションの維持や向上にとっても良い影響を及ぼしていた」という意見も見られた。

2. 否定的な授業体験の分析

肯定的な体験が多様であるのに対し、否定的な体験は驚くほど特定の状況に集中している。その大半は、個人の技能が他者の前で評価される「テスト」や「発表」に関連するものである。

2.1. 個人での発表・テストに対する強い抵抗感

ほぼ全ての回答者が、何らかの形で人前での個人的な演奏や歌唱に強い嫌悪感や苦手意識を示している。これは音楽授業における最も根深い課題であると言える。

テスト・発表の種類	嫌悪された理由	具体的な意見・引用
リコーダーのテスト	・クラスメイト全員の前で一人ずつ演奏するプレッシャー ・失敗への恐怖と羞恥心 ・教師による近距離での監視	「先生の前・又は全員の前で1人ずつリコーダーや歌のテストをした事。皆に見られているというプレッシャーから自分の本領を発揮出来なかった」「先生も自分の席の目の前まできてじーっと見られていたのがすごく嫌でした」
歌のテスト	・音程がずれることへの恐怖と、	「一人でみんなの前に立って指定された歌を歌う

スト	それによる他者からの嘲笑 ・個人の声が目立つことへの恥ずかしさ ・公の場での評価	テストがあったのだが、歌い始めてすぐに音程がずれてしまいみんなに大笑いされてしまい、嫌な思い出になった」「歌のテストを全体の前で行う方が嫌であった」
その他 の個人 発表	・準備不足や苦手意識がある中での指名 ・他者との比較や評価 ・公の場での失敗経験	「大合唱の練習で声を出せなかった2人が前に出されて歌わされたこと」「自分のミスがあった時キーボード全員ではなく、自分だけが弾き直しさせられた」

2.2. 受動的な授業内容への不満

実践的な活動と比較して、受動的な学習活動に対しては「退屈」や「苦手」といった感想が散見される。

- **鑑賞の授業:** クラシック音楽や伝統芸能（歌舞伎、能など）の鑑賞について、「ただ聴くだけの時間が多く、退屈だったり、特にすることもなかったのであまり好きではなかった」「きれいな音色だな、テンポの速い曲だなとか思っても、どう文字に表せばよいのか分からなかった」といった意見が見られ、能動的な関与が少ないことが不満の原因となっている。
- **座学:** 音楽史や楽譜の読み方に関する授業も、一部の回答者からは「嫌だった」とされている。特に「楽譜を読むのが難しい」「音符を教科書に振るのが苦手」といった、技能習得の難しさが否定的な感情に繋がっている。

2.3. 指導法および授業環境に起因する問題

教師の指導法やクラスの雰囲気、物理的な環境も、否定的な体験を生む要因となっている。

- **評価方法:** 楽器の演奏技能によって担当楽器が決まるオーディション形式（「リコーダーの上手さなどでなんの楽器をできるかを決める」）や、生徒同士で評価させる方法（「クラスみんなが1人の歌を聴き、良いと思ったらパー…などを出して、その合計で成績をつける」）は、不公平感や心理的負担を生じさせている。
- **指導スタイル:** 「抽象的な指示にイライラしていた」「熱量が足りないと怒られた」など、教師の指導内容や情熱が、生徒の受け止め方と乖離する場合がある。
- **衛生面:** 「クラスメイトとの楽器の使いまわし」「後ろの人のリコーダーから唾が垂れてくること」など、リコーダーをはじめとする楽器の衛生面に関する懸念も挙げられている。

3. 考察と今後の教育への示唆

これらの感想は、単なる過去の思い出の共有に留まらず、未来の音楽教育を考える上で重要な示唆に富んでいる。

3.1. 共通認識の発見と共感

多くの回答者が、自分の苦手意識（特に個人テスト）が他の多くの人も同様に感じていたことを知り、安堵や共感を示している。「クラスの大半の人が個人で行うテストや、発表会が

嫌だと思っていたと聞いて、自分ではなかったのだと少し安心した」「皆同じ気持ちだったんだなと思った」といった感想は、この問題が個人的な資質ではなく、教育システムに内在する構造的な課題であることを示唆している。

3.2. 評価方法への提言

否定的な体験の多くがテスト方法に起因することから、その改善策について具体的な考察がなされている。

- **ICT の活用:** コロナ禍をきっかけに導入された動画提出が、人前での発表が苦手な生徒にとって有効な代替案となりうることが示されている。「コロナで動画で提出されるようになったことで結構いい感じになってるな」。
- **テスト環境の工夫:** テストの心理的負担を軽減する方法として、「別の部屋でリコーダーや歌のテストをすれば恥ずかしさなども軽減できる」「みんなが練習している音が混じり合った中でのテストであれば、緊張も少なくなる」といったアイデアが挙げられている。
- **評価の多様化:** 一人で歌わせるのではなく、「複数人で歌ってもらうなどの工夫が必要」という意見もあり、評価方法そのものの見直しが求められている。

3.3. 体験的学習の重要性の再確認と指導者の役割

肯定的な体験が実践的・協同的な活動に集中している事実は、体験的学習の重要性を改めて浮き彫りにしている。今後の教育においては、この点をさらに強化する必要がある。一方で、ある回答者は「人前でやる経験は大事だなと思います。先生のすべきことは、人前で誰かが頑張っている時、相手を応援したり、ミスしてしまったら絶対にばかにするようなことをさせないような指導をすべきだと思います」と述べ、単に人前での発表をなくすのではなく、それを安全に経験できる心理的安全性の高い環境を教師が構築することの重要性を指摘している。

4. 結論

小学校の音楽授業は、児童にとって「みんなで創り上げる喜び」と「一人で評価される恐怖」という二つの全く異なる顔を持っている。多くの児童が共有する肯定的な記憶、すなわち合唱や合奏、多様な楽器との出会いは、音楽教育の大きな成果である。しかし、同時に、個人テストという形式が多くの児童に与える深刻な心理的ストレスは、音楽嫌いやトラウマを生み出す温床となっており、看過できない課題である。

今後の音楽教育においては、児童が安心して音楽活動に取り組める環境を整備することが最優先事項となる。具体的には、ICT を活用した個別評価や、グループでの評価、練習と評価を分断しない環境設定など、テスト方法を根本的に見直す必要がある。協同的な音楽体験の価値を最大限に引き出し、個人の評価に伴う負の側面を最小化することこそが、全ての児童にとって音楽が「至高の時間」となるための鍵である。